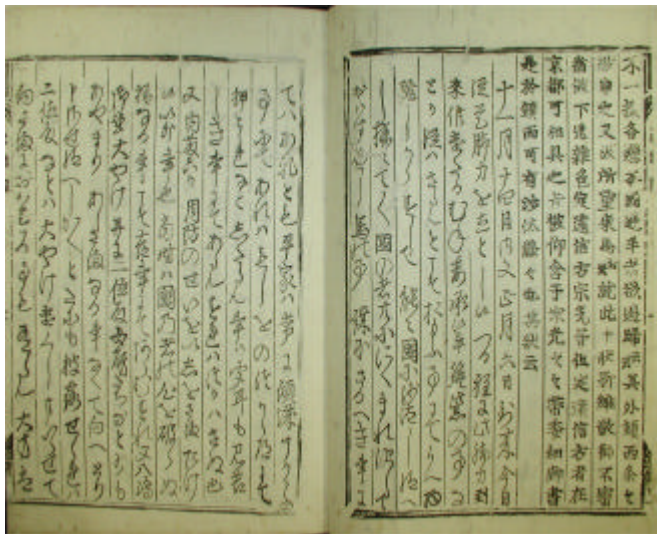


目次	
貴重書紹介 伏見版 東鑑 図書館長 高田 信敬	..... P.1
お久しぶりです！ 石井先生 文化財学科教授 関 幸彦	..... P.2-3
図書館からのお知らせ	..... P.4

### 伏見版 東鑑

江戸三百年太平の基礎を築いた武将徳川家康(1542~1616)はまた、文事を好む人でもあった。伏見滞在中の慶長4年(1599)より同11年の間、当時最先端の活字印刷術を用いて様々な出版を行ういわゆる伏見版である。朝鮮半島由来のこの新技術で制作された本を一般に古活字版と呼ぶが、それらは今日、書物の風格・文化史的意義等から、きわめて高く評価されている。東鑑(吾妻鏡)は小田原北

条氏伝来の古写本を基とし、富春堂五十川了庵が慶長8年刊行着手、10年3月に完成した(徳川実紀・鷲峰文集)。当館の東鑑は10冊のみ、残念なことに揃い本ではないが、堂々たる書品と本文研究上の重要性、漢字をもっぱら使うこの時代の古活字版にあって珍しく平仮名活字を交えることなど、見所の多い典籍である。



掲出本10冊の内容は次の通り。第1冊(巻2)、第2冊(巻4)、第3冊(巻5)、第4冊(巻22~24)、第5冊(巻25・26)、第6冊(30・31)、第7冊(34・35)、第8冊(36・37)、第9冊(38~40)、第10冊(41・42)、したがって全51巻のうち19巻分存。かなりの虫損を被っ

ていたが、現在補修済み。第1冊から第3冊までは薄茶色の原表紙、縦27.9横20.8㎝。縦17.6横3.3㎝の四周双边枠中に「東鑑 二」等と刷った原題簽が残るのは貴重である。第3冊以下は改装。元来1巻1冊の仕立てであったが、改装された部分は合冊となる。本文は四周双边(縦22.8横17.5㎝)有界每半葉12行、1行20字。黒口花魚尾に書名「東鑑」と巻序・丁数を刻した版心。内題は「新刊吾妻鏡巻第二」の如くである。

古活字版中の尤品伏見版のうち、徳川家康の命を受けた閑室元信(1548~1612)が伏見円光寺で印刷したものは漢籍を中心とし、大振りの活字を使用する。一方家康の愛読書であった東鑑は、当時の医学書にしばしば見られるやや小さい活字を使い、富春堂五十川了庵の出版であるところが異なる。なお、漢字と併用された仮名は、最も早い平仮名活字の使用例のひとつである。(図書館長 高田信敬)

## <お久しぶりです！ 石井先生>

文化財学科 教授 関 幸彦

長い間、御無沙汰しました。でも、やっと再会できたようです。わたしどもの文化財学科に石井文庫の一部が移ってきたからです。図書館がいささか手狭になった関係で、膨大な先生の蔵書運び込むのに、1年余りがかかってしまいました。お許しください。その間、ダンボール箱で少し窮屈だったかもしれませんが、関係各位の尽力で収まるべきところにうまく収まったようです。

壮観です。見事です。先生の学識のふところの深さが手に取るように実感できます。先生とお別れして2年余りが過ぎました。この間、東大時代の先生のお弟子の皆様が、ご自宅にある蔵書を目録化する努力をされました。著作集刊行のためとお聞きしました。先年亡くなられたご尊父様も国文学の大家であった関係で、蔵書のなかにはその方面の書物もあるようですね。

私も鶴見大学に石井文庫を創設するにあたり、ご自宅に伺いました。本宅以外にマンションを借りられ、それでも収納できずにトランクルームにも預けられた蔵書数は、約2万5千冊にもおよび、途方もない数量でした。今更ながら先生の該博な知識と専門を超えた向学心に頭が下がる思いがしたものです。

先生が亡くなられたのが平成13年(2001)の10月24日でした。その後、年末から約半年をかけてお茶の水女子大学の安田次郎氏が中心となり、目録を作成され、その完了を待って鶴見大学への搬入が行われました。たしか3回にわたり、トラックに満載されたダンボール箱が図書館に運び込まれました。これを受け入れるに当り図書館側では飯島事務長をはじめ、職員の皆様にご苦勞を頂きました。

膨大な蔵書を整理された館員のご助力はさぞや大変だったことでしょう。昨年の暮れに奥様の石井靖子様をお招きし、学長以下が列席し、石井文庫の寄贈感謝の式がおこなわれ、そのおりに目録を贈呈させていただきました。

今回、文化財学科に収蔵された約7千~8千冊の蔵書は、図書館にある石井文庫(1万2千冊)とは別に文化財学科として独自に管理するものです。身近な場所で院生や学部学生の目にふれる所に石井文庫が設置できたことは、何と幸せなことでしょう。おそらく、石井先生の遺志にもそぐうものと思います。ご家族より蔵書恵贈の申し出を受けたことは、誠にありがたいことでした。大学側に相談し、了解がなされました。この間、他大学からも石井先生の蔵書を受け入れたい旨の要望もあったようです。

もちろん、これを利用できるのは文化財学科の学生だけではありません。他学科の学生や院生も大いに歓迎です。学問に垣根は不要のはずですから。そうですよね、石井先生。

おそらく、そして間違いなく先生もこの判断には賛成して下さるはずだと思います。それはそれとして、石井文庫の6号館への搬入を黙々と行ってくれた学生諸君を誉めてやって下さい。そのなかには先生のゼミの学生もたくさん参加しました。約百名近くの院生・学生が協力してくれました。

石井文庫のラベル貼りから収納まで、わが学科が一体となって作業をなしました。その中には、先生の授業を受けたことのない学生もいたはずですが、でも、みんなが一つの目的のために1月31日(土)早朝10時から夕方4時にかけて、黙々と、しかも熱気に満ちた作業を達成しました。

その気分は本当に素晴らしいものでした。6号館の地下の文化財学科の廊下が、それこそ本で溢れ



図書館書庫内の石井文庫

返っていました。着々と本が所定の場所に納められ、ほぼ完了した時の壮観さはなかなかのものでしたよ。先生とともにしばしばお酒を飲み雑談をかわした合同研究室に約1千5百冊。実習準備室に3千冊。大学院研究室に1千冊。個人研究室に1千冊。製図室にも5百冊。また仏教文化研究所に5百冊と、それぞれ分置されました。上記はあくまでおおよその数量ですが、今後はこれを登録する作業を行い、その上で学生への貸し出しを行いたいと考えております。先生の貴重な蔵書をしっかりと管理することも、わたしどもの責務だと思っております。

このうち合同研究室の壁面にピッシリと置かれた石井文庫は圧巻ですよ。なるほど学問の場としての研究室の気分です。少し狭くはなりましたが、アカデミックな感じですよ。いいですよ、とても。



文化財学科合同研究室内の石井文庫

われわれはここに授業日には1回必ず立ち寄りますので、先生といつでも再会できるわけです。私事ながら、この書棚のなかには私の拙い書物も三冊ばかり見つけました。多分、以前に先生に贈呈させていただいた書物だと存じますが、昔の自分に会えた気がしました。

それにしても、膨大な量の石井文庫の質の高さは、驚異です。ご専門の中世史分野は当然としても、それ以外の日本史各時代の専門書はもとより、中国史・西洋史さらには考古学や国文学・民俗学など多岐にわたっていました。また全集類や双書類、さらに県史・市町村史などの中には今日では入手困難な文献も多く、われわれにとっては宝の山に入った気がします。

さらに貴重な雑誌もそうですし、何より歴史学に必要な国史大系・大日本史料・大日本古記録・史料大成など、基礎史料がそろっているのがたのもしい限りです。まるで文化財学科に図書室が誕生したかのようです。

うれしい悲鳴ですが、でも少し心配があります。学生諸君がその便利さに慣れすぎて、自分自身で本を買わず、さらに言えば本を見るだけで満腹感を覚えてしまうことです。でも、そんなことは贅沢な悩みですよ。石井文庫の壮観さを見ることで学問に生きた一人の歴史学者の人生に想いをさせる機会を与えてくれた、そんな刺激あふれている場が出現しました。ありがとうございます、石井先生。

われわれは、この石井文庫の貴重な遺産を守りながら、これを存分に利用し、学閥ではなく学統（学問の伝統）にいそしむべく頑張りたいと思っています。この文章を書きながら、合同研究室の一隅に先生のご著書『鎌倉びとの声を聞く』（NHK出版）が目にとまりました。

この合同研究室で授業が終わったときに、何度かお酒をご一緒したことがあります。“石井進の声”が聞けそうな、そんな場で学問を語り合うことの楽しみをかみしめている次第です。

腕を組みながら、楽しそうに笑っている、そんな姿が蘇ってきますね。“ウーン、関さん、ボクはそんなに立派な人間じゃありませんよ。？”

先生はしぐさや言い方に独特の雰囲気があり、物まねされやすかったみたいですね。それだけ親しみもあったということでしょうか。

特任教授として鶴見大学にお招きして、およそ3年程度の短い期間ではありましたが、この間のびやかに、そして楽しそうに学生たちに接していただきました。石井文庫は、その石井先生の「知の足跡」を知る“形見?”であり、これを存分かつ有効に利用することで、未来につながる学問の形をさがしつづけたいと念じております。私どもを、石井文庫を介し御指導下さい。

そして最後に、石井文庫に携われた多くの方々のご苦勞にお礼を申し上げます。

# 図書館からのお知らせ

## 図書館活用支援について

「鶴見大学図書館利用マップ」の改訂に加えて、新たに「図書館活用ガイド」を作成しました。また、今年度の全学科の新生向けには、図書館活用講習を実施します。図書館では、活用ガイドや活用講習によって、学習支援サービスを積極的に展開する予定です。

## 図書分類の変更について

図書の分類法を「日本十進分類法7版」から「同9版」に変更しました。昨年11月から新たに受け入れられた図書には、新しい時代の知識体系が反映されるようになりました。

## 書架のリフレッシュ

利用の低下した図書を書庫に移動しました。これにより、近代小説(913.6)、近代評論(914.6)、歯科(D)の書架がリフレッシュされました。書庫内図書の閲覧・貸出はカウンターに申し込んでください。

## 第101回貴重書展 《目で見える英米の辞書史》4月14～27日（学校法人総持学園創立80周年記念）

鶴見大学英語英文学会企画

本格的な英語辞典の歴史を実物でたどる。英語辞典は、イタリア語辞典、フランス語辞典と較べるならば、かなり遅れて本格的なものがつくられた。ジョンソン『英語辞典』から近代的な英語辞典とするのが通説である。

ヨーロッパの国語辞典の模範となったイタリア語辞典と、ジョンソン『英語辞典』の種本であるベイリー『英国辞典・第2版』をも展示する。これらは、お茶の水大学名誉教授木原研三先生のご好意によるもので、今回の展示をユニークなものとしている。

主な展示本は次のものである。

- ・クルスカ学会編『イタリア語大辞典』( *Vocabolario degli accademici della Crusca* ) 第2版(1623)
- ・ネイサン・ベイリー『ユニバーサル語源入り辞典』(1721)、『英国辞典』(初版1730；第2版1736)
- ・サミュエル・ジョンソン『英語辞典』(1755) ( 図 1 )
- ・ノア・ウェブスター『アメリカ英語辞典』(初版1828( 図 2 )；第2版1841( 図 3 ))
- ・チャールズ・リチャードソン『新英語辞典』(1837)
- ・ジョーゼフ・ウスター『英語辞典』(1860)
- ・ノア・ウェブスター(グッドリッチ、ポーター改訂)『アメリカ英語辞典』(1864の英国版)
- ・ウィリアム・ホイットニー『センチュリー英語辞典』(1889-1891)
- ・ノア・ポーター編『ウェブスター国際英語辞典』(1890初版1892年刷り)
- ・ジェームズ・マレー他『新英語辞典』(NED)(斎藤秀三郎旧蔵本)
- ・『ウェブスター新国際英語辞典』(初版1919；1924刷り)『ウェブスター新国際英語辞典』(2版)

図 1

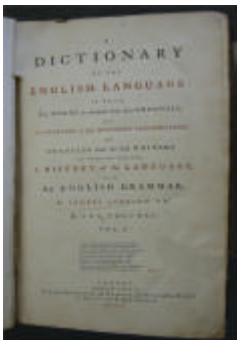


図 2



図 3



アゴラ - 鶴見大学図書館報 - 第111号 2004年4月1日発行

編集・発行 鶴見大学図書館

〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見2-1-3 Tel:045-580-8274 Fax:045-584-8197

鶴見大学図書館ホームページ <http://library.tsurumi-u.ac.jp/library/>